

# 実習レポートを生かした共感的学習の試み(2)

山 森 泉

## I. はじめに

本学の紀要34号(註1)において、1年次の7月に保育所実習(前半)に臨んだ学生たちの心境の変化、特に自信を喪失しかけた学生にどのようにしてモチベーションを維持させるかについての試みを実践報告という形でまとめた。ただし、それは原稿作成時の11月末までの試行であり、年度途中の経過報告であった。後半12月の実習で個々の学生の不安や悩みがどのように変化したのかという報告までを含めて、初めてこの試みの意義が見えてくる。そこでこの稿では、その後の経過として、モチベーションの持続を図るためのレポート読み合わせが学生にどのように受け止められ、2回目の実習を終えたのかについての報告を行い、併せて動機付け、学習過程などの先行研究に基づく考察をまとめた。

## II. 1. 実習レポート課題

適切な指示を出すことにより、何をレポートにまとめるかについての工夫がしやすくなる。今回の実習レポート課題の項目は、以下の4項目であった。

- (1) 担当した保育室のレイアウトとそこに見られる配慮や工夫
- (2) 自分が担当した部分実習の内容と感想——もし上手くいかなかったとしても、貴重な体験であるから、なぜ上手くいかなかったのか考えてみよう
- (3) 実習中の印象的な出来事——(2)と重なる場合は、7月と比べて子どもが成長したと感じたこと
- (4) 7月の実習と比べて自分が成長したと思ったこと
- (5) (あれば) その他

項目(1)は、本来1回目のレポート課題とすべき項目ともいえるが、7月の時点ではまだ十分に乳児保育や保育所の果たす役割について学んでいない学生にとっては、表面的にしか捉えられないのではないかと考え、今回に含めた。単に配置図を記すだけでなく、どのような点に保育者のどのような配慮や工夫が見られるかについても説明を加えることを指示した。

項目(2)は今回の実習の中心であり、どのような内容で実施したのか、準備、実際の進行、反省という内容が今回のレポートの中心になっている。自分が担当したことを客観的に見ることができるかどうか、自己満足で終わってしまっていないかの確認でもある。実習のあり方が変わったため、1年次で部分実習を担当するのはこの学年が最初である。各自がどのように取り組んだのか、保育所ごとにどのように担当させてもらったのか、短大側としても把握しておきたいことである。(事

前に部分実習の担当日時、内容を一応調査はしているが、予定が変更されたり、実習が始まってから変更になったりするケースもある。)

(3)の項目に関して、ほとんどの学生は7月の実習時と同じクラスを担当している。1年次では3歳未満児の担当が中心となっているため、特に0、1歳児を担当した場合、12月までの5ヶ月の間に個人差はあるもの子ども達は大きく成長している。テキストで学ぶ知識が担当した子ども達の成長と重ね合わされて生きた知識となって身につくはずであり、それを学生たちはどのように受け止めたのかという点で、学生たちの学びを確認できる。

(4)は他者との比較でなく、学生が7月の実習での反省点をどのように生かしたのか、自分自身での確認である。またこの課題を出すことで、12月の実習の心構えを再確認する意図もある。

## 2. レポート作成時の意識

前回レポート読みあわせを実施したことで、今回のレポート執筆時には、他者に見られることを意識して本音で書けなくなる恐れも感じた。そこで実習終了後のレポート発表時(レポートは提出済み)に、感想と一緒にレポート執筆時の意識を調査した。

「今回のレポートを書くときに、クラスの人達に読まれることを意識して書きましたか」という質問に対し、学生の回答(回収121名)は、

- ・とても意識した：2名
- ・少し意識した：50名
- ・最初は意識していたけれど、書いているうちに忘れていた：7名
- ・全然意識しなかった：56名
- ・その他：6名(読まれるということをすっかり忘れていた、まだ完成していない、など)

であった。この結果から見る限り、読まれることを意識して本音を書けなかったという学生はほんのわずかであり、自分にとって失敗だった実習内容もあまり隠さずに書いているようである。また担当者二人で下読みした際にも、内容を特に隠しているものや偽っていると思われるものはなかった。

## 3. レポート作成力の向上

前回の実習後に提出されたレポートは形式の不備や内容面の不足のため再提出者が14名にも及んだが、今回は部分実習という具体的な内容があるためか、レポートは全体的に分かりやすく読みやすく書いてあり、再提出該当者はなかった。また、1回目は項目を無視して書いた学生が十数名いたが、2回目は0。1回目の取り組みにより、2回目の実習体験レポートでは、全員指定通りにまとめることができた。指定項目に沿ってまとめる方が書きやすく読みやすいことを、他者のレポートから学んだ結果といえよう。また、レポートの書き方も長短両面から学ぶことができ、「書き方がわかった」「自分ではしっかり書いたと思ったが、不十分だったことがわかった」という副産物があった。

## 実習レポートを生かした共感的学習の試み（2）

1回目と2回目を比べると、明らかにレポートの書き方が向上し、学生たちの感想にもレポートが読みやすい、書き方が上達しているとあった。これは、各自が読んだときも、発表を聞いたときも、どちらの感想にも記されていた。例を挙げると、

- ・前回のレポートの内容よりも、みんな書き方や内容（観察や体験）に変化や成長が見られた。
- ・前回のレポートよりも内容が濃く、目の付けどころも変わっていたので驚いた。
- ・7月に比べレポートの書き方もとても上手にまとめられていてとても驚き、感心した。
- ・聞いているとみんなのレポートの書き方がとても上手だと思った。私は、「～だと思った、楽しかった、面白い」などを繰り返し使っていた。やはり調子が変わり、いろいろな言葉を使えるようになりたいと感じた。
- ・レポートはとても読みやすいものもあれば乱雑に書いてあると思うってしまうものもあった。私も決して字は上手くないが、誰がいつ読んでもいいように配慮する心配りが必要だと思った。今思えば、黒板に字を書くとき、大きさがらうしか考えていなかったように思う。実習日誌や指導案でもこういうものは出てくると思う。普段から心がけたいと思う。
- ・みんな内容がとてもわかりやすく、学んだこと、反省すること、次に頑張りたいことなどが書かれていて、聞いていた私は自分のレポートはただ書いていただけだったと思ってしまった。もっと反省したり気付いたりした点など書けばよかった。
- ・みんな12月の実習は楽しかったみたいだ。でも楽しいだけで終わっているレポートもあった。このように、他の学生のレポートが上達していること、自分の体験やレポートと比較して内容面でも文章自体でも反省すべき点を見つけていること、良くない点も具体的に指摘できることなど、レポートの書き方や内容について、他の学生のレポートを的確に評価している。

レポート読み合わせの記入欄（気づいたこと、感心したこと、共感したこと、その他）へは、多くの学生は3～4行程度（記入欄にほぼ埋まる分量）を記入している。

例えば

- ・子どもの間のトラブルが起きたとき、なぜだめなのかを気付かせる前に保育者自身が気付かなければいけない。こういう難しさを分からないといけない。
- ・レイアウトの説明書きがとても細かいところまで書いてあって、子ども達のための工夫を知ることができた。
- ・部分実習は自分自身が楽しみながらすることに心がけたと書いてあり、とても勉強になった。保育者一人が活動するのではなく、子どもと一緒に活動するものだと学んだ。

などであるが、45分間集中してレポートを読み、レポート用紙3～4枚の文章から共感できることや学んだことを読み取って短時間で3～4行にまとめるのも、（一般の文章の要約とは異なるものの）記述力の向上にもつながっていくのではないだろうか。最低5人分を読むという繰り返しのやりこつをつかむこと（読み取りの速さ、要点の把握など）も、学習の効果の一つである。

### Ⅲ. 1. 学生の様子

今回も、実習終了後の授業第2回目にレポート読み合わせ、3回目にレポート発表を実施した。部分実習の説明を入れたことで、前回に比べどの学生もレポート量が増した。通常的时间（45分）しか取れなかったため、読み合わせの際に注意した点は、「(1)～(4)のいずれかの項目に絞って感想をまとめる」という点である。それ以外は、前回の経験があるため非常にスムーズに進行した。前項で述べたように、学生のレポートの書き方が向上していたため、読み手も視点を絞って短時間で読むことが可能である。時間内に全員が5人分を読み終え、さらに1割強の学生は6～7人分を読んでいた。

発表者には今回10人の学生を選んだ。レポートの書き方が上手いからということではなく、皆に聞かせたい体験（成功や失敗、工夫など）や、考察があるかどうかを重視した。前回の発表では、発表者全員にレポートを全部読んでもらったが、今回は項目ごとに発表者を選び、(2)の部分実習を中心に、(3)や(4)についても発表してもらった。事前に指定の箇所を説明し、大半の学生に一度読みの練習をしてもらった点が前回の発表と異なる点である。

前回選ばれた学生の発表を聞いているので、今回発表者になった学生は、聞いてもらうこと、聞きやすく発表するという意識も意識し、自分なりに工夫して発表に臨んだことが感想(2.(1)参照)から分かる。失敗体験を語ってもらう学生には、事前に発表者に選んだ意図（貴重な体験であり、なぜ失敗したのか、どうすればよかったのかの考察が出来ているので自信を持ってよいこと、他にも同じような失敗体験をして落ち込んでいる学生がいて、彼女たちの励ましや学びにもなることなど）を説明し、了解を得てから発表を行った。

### 2. 学生の感想

#### (1) 発表者の感想

- ・今日は自分がレポート発表をするということで、とても緊張した。始める前は失敗したことをみんなに話すのは恥ずかしいし、嫌だなあと思っていた。けれども発表を終えるとなぜかすっきりとしていて、発表して良かったと思うことができた。
- ・今回は自分も発表する立場になった。自分なりに落ち着いてはっきりした口調で発表できたと思う。でもみんなの前に立ったときはとても緊張した。先生や発表する人ってこんな想いをしているんだと知ることができた。
- ・発表者として上手く聞き手側に伝えられたか心配だったが、なるべく堂々と読めるように努めたおかげで、緊張することなく発表ができて安心している。
- ・レポートを読んだり聞いたりしてすごく緊張した。最初は「嫌だなあ、何で私なんやろう」と思った。最初の発表者の方は上手くまとめ、また堂々としていて、聞きやすかった。あれほどまで堂々と発表できなかったけれど最後まで言えてよかった。発表してみてよい体験をしたと思った。このように、発表者はいずれも、聞く側のことを考えており、どうしたら聞きやすいかを工夫していたようである。

## 実習レポートを生かした共感的学習の試み（2）

### (2) 聞き手の感想

- ・とてもわかりやすく聞きやすく、ただ「すごい」と思うばかりでした。
- ・みんなの発表の仕方がとても上手で聞きやすかった。人に聞いてもらうときは声や話し方がとても大切だと思う。私も話し方に気をつけようと思う。
- ・みんな自分が行った部分実習の内容を、具体的かつわかりやすく書いて発表してくれ、すごく良かった。自分が実習中に失敗したことを次のステップに繋げる意欲や熱意が伝わってきた。
- ・発表してくれた人々は学んだことをしっかりまとめ、堂々と発表している。その姿を見て、とてもすごいと思った。

### (3) 新たな気づき

学生たちの感想の中に、抱えていた自分の問題点の解決法を他者の経験の中に探し取っていく姿勢が窺える。人が何らかの情報を得ようとするとき、はっきりした目的を持つ場合と、無意識のうちに情報を得る場合とがある。この点で言えば、実習体験レポートはかなり目的がはっきりした情報収集に当たると言える。

- ・やはり一番興味があったのは、他の人達がどんな部分実習をして、何を得たり感じたりしたのかということだった。読んだことですごく勉強になったので、次の実習に生かしたい。
- ・他の人のレポートを読むことで、実習先の保育者の言葉を見るのと同じように、実習生の言葉も見ることができて参考になった。私が困った部分で他の人がどのように対処したのかも知ることができた。

一方、以下の文章に見られるようなケースは、「積極的に探していたわけではないのに、役立つ情報に偶然に出会って、はじめて自分がその情報を求めていたことに気づく」（註2）ことに該当する。

- ・私は自分の中で部分実習は成功したと思ったので、発表者の失敗談や反省を聞いて自分の部分実習をもう一度見直そうと思った。
- ・指導案を書く時に大まかな流れさえ書いておけばよいと思っていた。けれどそれだけでは自分の考えがきちんとまとまらず、失敗してしまうのだということを知った。
- ・考えて保育することや努力することなどが聞けて、自分ももっと深く保育について考えるべきだと思った。
- ・自分とは違った年齢を担当しているので、この年齢ではこんなことができるのだということを知ったし、部分実習のそれぞれの工夫はそのものだけに使えるのではなくいろいろなものに使えると思い、勉強になった。
- ・みんな子どもが伝えたいことや活動の意味をとても敏感にとらえ、深く考える力がついていると感じた。そして保育士の先生方としっかりコミュニケーションをとれている。私は気づいたらみんなの背中を見ているような気がした。まだ、もう1年あるのでみんなに追いつき、そして追い越せるようにがんばろうと思った。
- ・発表者全員が自信を持って話すことができていると感心した。この数ヶ月の間に考え方や実習に

対する見方が変わっていることが伝わった。私も自分自身を見つめ直してこれからを過ごしていきたいと思い、とてもためになった。

- ・実習中の出来事から保育制度のことについてまで考えながら実習をしていた人がいたことにも驚いた。
- ・自分のことだけでなく園の方針のことも考える人がいて、考えの広さにびっくりした。保育者からのアドバイスは本当に大きいと思った。他の人へのアドバイスも自分に当てはまることが多いので、心に留めておきたい。
- ・発表者の反省点が自分の知識になり、とても勉強になった。

など、前回の読み合わせや発表以上に、一人ひとりの読む姿勢、聞く姿勢が深まっており、それが文章にも表れている。また、

- ・前回の実習では、みんな初めてということもあり、「不安」「緊張」という言葉が多かったけれど、今回は「余裕」「自信」というような言葉が見られた。

という感想のほか、前回の感想に比べて今回は、成長した点を「深く考える」「考え方や～に対する見方」「考えの広さ」という点で捉えるようになっており、記述する用語にも変化が見られる。

#### IV. 1. 失敗に学ぶ

今回発表者に選んだ10人の中には、何とかなるだろうという認識の甘さや準備不足から部分実習で失敗したケース、準備は十分で余裕さえあったのに、時間帯が通常とずれたため半数の子どもが実習者の声かけに反応せず“お昼寝タイム”に入ってしまったケースなどがあった。しかし、この稿の意図はどうすればよかったのかという反省や方法を検討することではないので、詳細については割愛する。以前の実習では子ども達との関わりについてが主であった失敗体験が、今回は自分自身の取り組みや、配慮についてが主になっている。学生たちは失敗をどのように受け止めたのかについて以下に抜粋する。

- ・部分実習では、私が思っていた以上にみんなハイレベルなことをしていて驚いた。私はリズム活動なんて頭の中になかったし、手遊びと絵本でよいだろうと思っていた。しかし、話を聞いてみんないろんなことにチャレンジして、それが成功でも失敗でもよい経験となっていると感じた。今の間に失敗をおそれず、何でもチャレンジしておくと思えば後々役に立つと思うので、今日の話から学んだことを生かし、次回の実習では新しいことに挑戦してみようと思った。
- ・成功だけがすべてではないと思った。失敗したからこそわかることもあると聞いていても、実際に体験することで初めてその意味がわかるのだと思った。
- ・7月の実習と比べて成長した箇所は人それぞれだが、みんな一度失敗したことがかえってプラスになっていたと思う。今回の実習での失敗談も多く話されていた。もちろん私もたくさんの失敗をした。ということは、私にはまだまだ成長する余地があるということだ。いつまでも失敗を悔やむのではなく、その失敗をふまえてもっともっと成長したいと、今日の発表を聞いて強く思った。

- ・私だけでなく発表者の中にも部分実習を失敗した人がいた。その人達のレポートの反省を聞いて、失敗したからといって落ち込むだけでなく、何が原因だったのか、どうすればよかったのかなどをきちんと考えるべきだと思った。
- ・みんな部分実習での失敗や上手くいかなかったことを、どうしてそうなってしまったのかしっかり考えて反省していた。私も部分実習で失敗して勉強になったことを次に活かしたいと思ってはいたけれど、そのためには発表していた人達のように、上手くいかなかったことをもっと深く考えなければいけない。発表を聞いて私はいろんな物事についての反省があまり出来ていなかったことに気付いた。もっと深く物事を考えなければいけないと思った。

自己高揚のための方略に、「下方比較」がある。これは「自分自身よりも劣っている人と比較することによって自尊心を維持・高揚させようとする方略」である。「失敗したときに自分よりも劣っている人や不幸な人の情報を求めるという受動的な比較」に留まらず、意図的に相手を傷つけ、自分よりも劣った対象を作りかねないケースも起こりうる。（註3）したがって、失敗体験から学び合おうとするときに、十分な配慮が欠かせない。このような事例において、人々がともに学ぶことによって成長し続けていけるかどうかは、共同体の中にどのような社会規範が成立しているかにかかっている。例えば教室や学校の中に、よりよい理解に達するために探求することの価値を認め、理解するためには学び手は失敗してもかまわないとする社会規範が成立していれば、それは学生の学習を促進することになるであろう。（註4）この点で見ると、実習体験の失敗を学びへの転換と受けとめる下地はほぼできていたように思われる。

実習という現場での体験に失敗は付き物である。「自分だけかもしれない」と不安に思っていた学生たちにとって安易な「下方比較」に陥らないよう、「自分だけではなかった」という共通の土台に立つためのレポート発表者（発表内容）の選定と発表後の指導者のコメントに慎重さが求められる。

## 2. 自己効力感

他人の成功（失敗）の観察について「自分と同程度の人が努力を重ねて困難なことを成し遂げる姿を見ると（代理体験）、自分にもそれができるという信念が生まれ、高い自己効力感の形成につながる。」と言われている。（註2）また、持っている自己効力感が高いか低いかによっても、ストレスへの対処の仕方や失敗からの立ち直り方が異なってくる。

前回の実習におけるレポート読み合わせの感想では、できなかったのは自分だけだとひとりで悩みを抱え込んでいた学生が、他の学生も同様だったと知ることによって、前向きな姿勢を持つようになると述べていた。（註1）部分実習という目に見える体験について同じ仲間の成功や失敗を聞くことで、自らの進路や生き方を再認識した学生もいる。以下に、抜粋を挙げる。

- ・結局は自分次第だけれど、他の人も自分と同じ立場になって頑張っているということさえ思えば、少しは気持ちが安定する。みんなで保育士としての学びを高めていきたい。
- ・私は正直レポート発表を聞くのが苦しかった。なぜなら同じ一年間を過ごしているのに、みんな

山 森 泉

なは大きく成長し保育士に向かって進んでいるからだ。私は最近本当に気合いが足りず怠けていると思う。今の私が学校を辞めたところで他に何も出来ないだろうから、今はとにかく自分がこれから変われると信じて1日1日大切に過ごしていくしかないのだと思う。

- ・みんな7月よりも成長していると強く感じる。自分も12月の実習は全力でぶつかりよい体験・経験をしてきたはずなのに、みんなに置いてきぼりにされた気が少しした。もっと自分に自信を持てるように今まで以上の努力をし、自分というものを自分で理解する必要があると思った。
- ・聞いていて自分の実習のことを思い出した。10人の人のレポートを聞いて、また保育士になりたいという気持ちと頑張ろうという気持ちが湧いてきた。

学習とは、「繰り返し同種のないしは類似した問題を解く、あるいは作業を行うことにより、多くの場合に成績の向上をもたらすシステム内部の変化の総称」(註5)である。実習レポートを読み、発表を聞くという学びは一人ではできることではなく、同じような体験をした学生たちがいて成り立つことである。実習先の保育所ごとに雰囲気も方針も異なり、今回の部分実習に関しても単に担当年齢や回数の違いだけでなく、設定時間の長短や要求内容にも大きな幅がある。自分が体験できなかったことについて、他の学生の実習内容から学んだことを有効に生かすためには、学生の中に協調を尊重する文化が育っている必要がある。協調的な学習を行う中で、他人の視点があることに気づき、その視点に触れることにより当初から持っていた自分の考え方の見直しにつながるのであり、他人の考えと自分の考えを比較することによって、新しい考え方の着眼点を得て理解が深まっていくのである。(註5)

実習レポートに関して前回は今回も2回の授業時間を設定したが、それは全体に聞かせたい内容があるからであり、また、代表者の発表を聞くだけではこれだけの学びを得られないと考えるからでもある。前回実施したアンケートの中にも、「聞くだけで読む必要はない」という意見はなかった。(註1)一方、今回の感想のなかにも聞くことについてふれたものもあった。

- ・みんなとても緊張していたと思うけれど、聞いている方から見ているととても落ち着いてはきはきと発表していて、7月のときの発表会と比べて明らかに各々が成長したなと思って聞いていた。
- ・実習レポートを自分で読むときよりも耳で聞いたときの方が文章の内容を理解することが出来たし、その場でのその人達の気持ちもとても伝わってきた。耳で聞いて改めて理解することにより、自分のことへの反省や新たな発見などがあり勉強になった。
- ・目で読むのと発表を聞くのでは少し違って、発表を聞いた方が印象に残りやすい。

読解と聴解との違いには、基本的に入力が入力が文字言語によるか、音声言語によるかという大きな相違がある。一般的には聞いてわからなければ、読んでもわからないことが多い。しかし、繰り返し読むことができ、情報を取り入れる速度を自分で調整できる文字言語の方が、音声言語より理解しやすいこともあるようだ。最初に目で読んで、じっくりと考えて自分の実習を再度振り返っているから、発表を聞いた折にも新たな学びを得ることができるのではないだろうか。



### 3. 外化と協同学習

実習体験内容は個々の学生で違っていても、レポートの項目は予め指定されているので共通した書き方ができている。レポート読み合わせの取り組みにより、学生たちはお互い自分が体験していない「他者の体験に共感できた」と言う。さらに、複数の文章を比較しながら読むことで、わかりやすいレポートとは何かを身をもって学んでいったのである。同じ視点でまとめた文章を読むことの繰り返しで、読み取る力、何を中心にまとめればよいかというまとめ方のコツを体得する。他者の文章を読むときに自分だったらどうしたかという視点を持つようになる。これらを得たことで自己を客観視できるようになったのではないかと思われる。

文章のよい例、悪い例を挙げて授業で説明するやり方は効率がよいように見えるが、実は学生にとっては受身でしかない。自分で読み取り、自己の考え方や方法と比較すること、つまり「自分を“外化”すること」が、新しい視点の獲得につながるのではないかと考える。（註7）

以上述べてきたことは、教師からの指示によって得たものではなく、学生自身が自ら学び取ったことである。読みのプロセスの共有化が行われ、同じように実習をしたという自己の体験をすでに持っていることにより、他者の体験をモデル化しやすくなっている。読み合わせは、他者の体験を読むことで自己の体験の意味づけを深化させることができた「主体的学習」のひとつと言えよう。

## V. 終わりに

能動的な学びとは何だろうか。社会通念となっている伝統的な学習観では、「学習は、教え手が学び手に知識を伝達し、学び手の誤りを正していくことで生ずる」と考えられがちである。だが、「学び手にとって意味のある課題に取り組んでいるときはみずから知識を構成していくことのできる、有能な存在」となりうる。逆に環境をいくら整備しても「学び手が自ら学ぼうという主体的なはたらきかけ」がない限り、学習効果は薄くなってしまいうだろう。（註6）理想を言えば、1回目の実習から体験をグループごとに発表し合い、感想や質問やアドバイスを学生相互にしていくことが望ましい。しかし、現在の学生たちの集団内における心理状態を考えると、グループの指導者なしで話し合いが深められるほど成熟した状態にはない。100人を超える学生たちにグループでの話し合いをさせるにしても、自己の体験を、特に失敗体験をいきなり人前にさらすことは決してよいやり方ではない。また、気のあった者同士の小グループでは、表面的な会話や既知情報の再確認程度で終わってしまい、学びを深化させることは難しいようである。（註7）

他者の体験から学ぶ際には、学習における近接目標（身近で小さな目標）を示すことで成立している要素が大きく関わっている。ここでいう近接目標は、他の学生の実習体験での成功である。現場のベテラン保育士やテキストにおけるモデルケースなどの遠隔目標に比べ、近接目標は行動に対する直接の強化や手がかりをもたらしてくれる。近接目標を一つひとつ達成していくことによって、人は自らの努力の成果を判断することができ、その判断によって自己効力感を高めることができるのである。（註4）

学習に関するこれらの先行研究成果を踏まえながら、学生自身が相互に学び合える実習体験を次

年度の実習や「実習報告会」へつなげられるよう反省と検討を重ねて、引き続き効果的な授業のあり方を目指したいと考えている。

#### 引用文献・参考文献

- 註1：拙稿「実習レポートを生かした共感的学習の試み——次の実習につながる効果的指導を目指して——」『北陸学院短期大学紀要 第34号』2003年 67-82
- 註2：三輪真木子『情報検索のスキル——未知の問題をどう解くか』（中公新書）2003年 16、84-88
- 註3：宮本美沙子・那須正裕 編『達成動機の理論と展開——続・達成動機の心理学』（金子書房）1995年 165
- 註4：米国学術研究推進会議 編著『授業を変える——認知心理学のさらなる挑戦』（北大路書房）2002年 147、125
- 註5：波多野誼余夫・永野重史・大浦容子『教授・学習過程論——学習の総合科学をめざして』（放送大学教育振興会）2002年 9、108
- 註6：波多野誼余夫 編『認知心理学5 学習と発達』（東京大学出版会）1996年 182
- 註7：稲垣佳世子・鈴木宏昭・亀田達也『認知過程研究——知識の獲得とその利用——』（放送大学教育振興会）2002年